

金沢大学医学部創立百五十周年 記念式典及び祝賀会

創立百五十周年祝典号



開催日時 平成二十四年七月七日（土） 十時～十五時
式の内容

- （一）記念式典 十時～十時四十分
- （二）記念講演 十時四十分～十二時四十分
- （三）モニュメント除幕式 十三時～十三時十五分
- （四）記念祝賀会 十三時三十分～十五時

会場

金沢大学医薬保健学域医学類

金沢市宝町十三番一号

記念式典及び記念講演

医学部十全講堂

モニュメント除幕式

医学類F棟前

記念祝賀会

医学類教育棟及び中庭

記念式典次第

開式の辞

式辞

学長祝辞

来賓祝辞

山本 健 医学類長（医学部創立百五十周年記念事業実行委員会委員長）

中村 信一 学長

村田善則 文部科学省高等教育局医学教育課長

前田利祐 加賀前田家第十八代当主（記念誌・モニュメント題字揮毫）

谷本正憲 石川県知事

山野之義 金沢市長

閉式の辞

記念講演次第

講演1 講演者 本庶 佑（京都大学特任教授、静岡県公立大学法人理事長）

演題 「遺伝子が語る生命像」

座長 井関尚一 医薬保健研究域長

講演2 講演者 安藤忠雄（建築家、東京大学名誉教授）

演題 「これからの日本のあり方について」

座長 井上正樹 十全医学会会長

除幕式次第

挨拶・経緯説明 山本 博 医学系長

除幕

記念撮影 モニュメント 金沢医学館第一期生九名の像

記念祝賀会次第

開式の辞

挨拶・乾杯

万歳三唱

閉式の辞

佐藤 保 医学部十全同窓会会長

富田勝郎 附属病院長

創立百五十周年記念式典

式 辞

私どもが医学部創立百五十周年の記念事業を思い立ったのは、今から八年前、当時医学部長であった古川 仰教授を中心に準備を開始しました。

ご高承のごとく、金沢大学医学部は、文久二年三月に開設された金澤藩の彦三種痘所を起源とします。種痘所は前田家のご支援により、卯辰山養生所、金澤醫學館と規模を拡げながら発展しますが、明治四年の廃藩置県令によって財政的な支えを失います。しかし醫學館教員有志が私財を投げうって醫學館を維持し、また金澤の町や村の代表である町長・戸長が石川県に熱心に陳情した結果、明治八年には醫學館が県に移管され、「石川県金澤病院」として再出発いたします。

すなわち金澤醫學館は、前田家、金沢市民、石川県のご支援によって閉鎖を免れたのであります。そして明治二十年には第四高等学校醫學部となり、以後は国の医師・医学研究者養成機関として発展して参りました。本日は文部科学省高等教育局から村田善則課長、厚生労働省医政局からは、本学卒業生である佐原康之課長にご臨席をいただいております。まことにありがとうございます。

百五十年の間に本学関係者によって成し遂げられた国家的榮譽は、金澤醫學学校卒業生の上坂熊勝先生、石川県甲種医学学校卒業生の桂田富士郎先生、金澤醫科大学卒業生の岡本肇先生と井関尚栄先生、金沢大学医学部卒業生の岡本宏先生、法医学教授古畑種基先生、外科学教授久留勝先生、医化学教授岩崎憲先生、生理学教授大村裕先生の日本学士院賞受賞と、金沢大学大学院客員教授遠藤章先生の文化功労者顕彰であります。

本日は、日本学士院賞を受賞された皆さまのうち、大村裕先生、岡本宏先生にご来賓をいただいております。まことに光栄に存じます。

抗生物質の発見は、人類の寿命を二十年延ばしました。抗生物質以後の創業でもっとも評価されているのは、コレステロールを下げるスタチンで、人類の寿命を更に二年延長させたことと云われます。スタチンの発見者は、残念ながら本日ご臨席が叶わなかった遠藤章先生ですが、スタチンの臨床効果を世界に先駆けて証明したのは、本学の馬淵宏名誉教授のチームであります。

本学は、脳・がん・循環・環境医科学、子どものこころ発達研究センター、脳・肝インターフェース・メディスンなどの研究を推進していますが、最近、さらに真の疾病予防を目指した「スーパージン防医学」という、新しい学問領域を開拓しようとしております。本学の後進が、これらの研究の展開を通じて学問業績を挙げ、諸先輩につづく、国家的榮譽を得られるよう、祈念してやみません。

記念講演会終了後にお披露目をいたしますモニタ「医学の源流 未来への継承」は、金澤醫學館一期生九名の群像です。この群像は、明治六年頃のモノクローム

写真から着想されたもので、金沢美術工芸大学 石田陽介教授によって制作され、本学実行委員会にあっては、初期の構想の段階から完成に至るまで、山本博教授に特段のご尽力をいただきました。また、祝宴に合わせて公開いたします記念館資料室には、金澤藩時代に購入された人体解剖模型キンストレーキや、解体新書の初版本などが展示されております。少々ナフタリンくさいのが難ですが、短時間でもお運びいただければと存じます。さらに、祝宴会場の二階には、歴史的な資料をパネルにして展示しておりますので、併せてご覧下さい。

最後に、これまで本記念事業の実現のため絶大なお力添えを賜りました皆さまに、高い席からでございますが篤く御礼を申し上げます。

平成二十四年七月七日

金沢大学医学部創立百五十周年記念事業
実行委員会委員長 山本 健

祝 辞

本日ここに、各界各地域から多くの方々のご臨席を賜り、金沢大学医学部創立百五十周年記念式典が挙行されますこと、本学にとり誠にめでたく、心から慶びとすところであります。今日に至るまで文部科学省、厚生労働省をはじめ、関係各位には大変なご支援・ご協力を頂いて参りました。心からの感謝と御礼を申し上げます。

私は、五十年前、金沢大学医学部が創立百周年を迎えた昭和三十七年に本学医学部に入学いたしました。いま私達が会しております、この十全講堂は、同窓生や教職員等の浄財により、創立百周年を記念して建設され、百周年の翌年、奇しくも本日も同じ七月七日今頃の時刻（十一時四十分）に竣工式が行われました。医学部初の鉄骨コンクリート製建造物として忽然と宝町キャンパスに出現した十全講堂は、医学生の中には、モダンの象徴であるだけでなく、金沢大学医学部の伝統を具現する、圧倒的な存在感をもって映り、当時つけたインパクトはいまも脳裏に刻まれております。

十全講堂の「十全」は、皆様ご存知のように、紀元前の中国で著された「周礼」にある医師を評定する語、「十全為上」に由来し、十全は「十ながら全す」と読み下されます。十全の二文字は、明治二十八（一八九五）年、第四高等学校医学部の教職員、学生が渾然一体となって結成した会の名に冠せられました。その後、昭和に入り、学術研究を推進し成果を発表する十全医学会、母校の応援団としての十全同窓会、等が組織され、今日に至っております。

医学部創立百周年からの五十年を顧みますと、昭和三十八年の記録的豪雪、昭和

祝 辞

四十年代のインターン闘争や学園紛争、昭和六十年前後のキャンパス移転の是非を巡る論争、平成に入って着手された宝町キャンパス再開発および校舎・病院の新改築、平成十六年度の国立大学法人化等、節目となった出来事が思い出されます。また、教育・研究では、平成十三年度における大学院部局化に伴う、目的重点型専攻、脳・がん・循環・環境医科学専攻への改組、平成二十年度の学域・研究域への組織再編、最近では、金沢大学ならではの学問業績を基盤とした「子どものこころの発達研究センター」、さらには「脳・肝インターフェースメディシン研究センター」の設置など、さまざまな出来事を経験しつつ種々の事業が行われて来ました。栄光もあれば苦難もありましたが、天野貞祐と沖中重雄の言葉を借用して申しますと、医学部の歩んだ歴史は、伝統とその継承という一方の鎖を途切らせることなく、他方、創造と改革に不断に取り組んで新しい鎖をつくってきた、伝統と創造の二重らせんの形成の歴史であつた、と言えるかと思ひます。このように、連綿と紡がれてきた、伝統と創造の二重らせんが、健全な伸長を遂げつつ、今後も十全の名にふさわしい業績を積んでいけることを、心より念願いたします。

金沢大学医学部は、百五十年前に開設された加賀藩彦三種痘所を淵源としております。これは、金沢での近代医学教育が、種痘の接種技術、痘苗の分苗・保存についての教育や種痘医の資格認定からはじまったことを物語っています。全世界津々浦々への種痘の普及によって、人類最大の災厄とされた天然痘は、地球上から根絶されました。一九七七年十月二十六日、アフリカのソマリヤに発生した患者を最後に、天然痘は終熄しました。WHOはその後も二年間にわたり、念入りの監視を行って根絶を確かめ、ついに、一九八〇年五月五日、「天然痘根絶宣言」を発したのであります。

全ての病を遍く癒すことは、医学の究極の目標であり、医学者が理想とするところであります。医学部・医学類におかれましては、種痘所設立に関わった蘭方医黒川良安とその門下生達の心にあつたに相違ない、「人命を救わんとする強い願いと未だ不確かな治療法に対する恐れなき挑戦」、このことを胸に刻み、つぎの百五十年の間にも、これまで以上に新しい発見、発明を生み、一つでも多くの病気の根絶に寄与されることを大いに期待するところであります。

創立百五十周年の記念すべき今年、医学類の総合研究棟二期工事が着工の運びとなりました。この完成をもちまして、二十八年に渡る宝町鶴間地区再開発・金沢大学総合移転事業の当初計画は完了致します。これも一重に、関係各位のご支援の賜物と感謝しております。

若い世代さらには後世への万感の期待を申し述べるとともに、将来に渡る、皆様のご支援・ご協力をお願い申し上げ、祝辞と致します。

平成二十四年七月七日

金沢大学長 中村 信一

本日、ここに金沢大学医学部創立百五十周年記念式典が挙行されるにあたり、一言お祝いの言葉を申し上げます。

貴学部は、文久二年に前身校である彦三種痘所が創立されて以来、時代の変遷とともに着実な発展を遂げられ、このたび、百五十周年を迎えられました。

この間、貴学部では、一万人を超える多くの有為な医療人を輩出され、わが国の医学の進展・医療活動の向上に大きく貢献されました。さらに、研究においては高安病の発見や痛覚伝導路の解明、臨床においては骨髄移植、放射性同位元素を用いた治療など多くの日本初、世界初の成果をあげられました。

今日まで、医学部の充実、発展に尽力されました歴代の学長、学部長をはじめ、教職員各位の御努力に、深く敬意を表しますとともに、地元石川県・金沢市をはじめとする関係各位のこれまでの御支援、御協力に対し、心から感謝申し上げる次第であります。

二十一世紀に入り、生命科学の進歩や医療技術の高度化など、わが国の医学・医療をめぐる状況が著しく変化する一方で、高齢社会の急速な発展により、国民の健康意識も大きく変化してきております。

このような中、貴学部では平成二十年四月の医薬保健学域への改組によって、高度の専門性を担保するとともに、全人的医療とチーム医療を推進する人材育成に努められています。また、子どものこころの発達研究センターや脳・肝インターフェースメディシン研究センターを中心とした研究施設の開設、さらには基礎医学研究者および研究を通して明日の医療を開拓する人材養成を目指したメディカルリサーチトレーニングプログラムを開始されるなど、最先端の知識と技術を身につけ、温かさを兼ね備えた医療人育成のため、常に教育内容や教育方法の改善充実に努められていることは、誠に心強い限りであります。

最後になりますが、今後とも、教職員各位の一層の御研鑽と御尽力により、これまでに築かれた輝かしい伝統と実績をもとに、優れた教育や特色ある研究の展開、充実した医療の提供に引き続き御努力され、金沢大学医学部及び医薬保健学域がますますの充実発展を遂げられますことを祈念いたしまして、お祝いの言葉といたします。

平成二十四年七月七日

文部科学省高等教育局医学教育課長 村田 善則

祝 辞

おはようございます。本日は金沢大学医学部創立百五十周年まことにおめでとうございませう。この式典にお招きいただきまして光栄に存じております。百五十年というのは短いようで長いわけでございますが、彦三の地に種痘の方々が集まって活動を始められ、それを加賀藩として文久二年に許可したのが始まりということになっております。今朝ここにまいます前に、赤祖父様にご案内をいただきまして、彦三に立っている碑と、医学所跡に行つてまいりました。確かあそこは津田様のお屋敷だったはずで、今兼六園の中に移築されているのが医学所の建物だと思いますけれども、そのようなものが明治以降ずつと残っていることが、戦災で焼かれなかった石川県金沢の特徴かもしれません。半年くらい前でしょいか、山本先生が突然東京へいらつしやまして、こういうことをやるので記念誌の題字を書いてくれと言われまして、私はちよつと困りました。私は音楽が趣味でやつておりますが、音楽はやれば飛んでなくなりませうけれども、字というのはずつと残つてしまうものですから、下手くその字で困つたのでありますが、そういうわけで書かせていただきました。それでご本を頂きまして改めて一生懸命読んでみましたが、やはりたいしたもの、色々な偉い方を輩出されていることがよくわかりました。大学もどんどん制度が変わつておりまして、私が大学にいた頃――私は医学ではなくもつと雑駁な学科にありましたけれども――と比べて大学の改正、改革がたくさんあつて、色々厳しいこともあるようですが、中村学長のリーダーシップのもとに神経科学、臨床、薬学などの面で大変な業績を挙げておられるということでございます。今後とも、先生方や学生さんがさらに業績を挙げられ、次の二百年、三百年に向けて、医学や医療のナショナルセンターとしてますます優秀な人材を輩出していただいて、その存在を世界に示してくださるよう、ぜひともお願いしたいと思ひます。かなわぬことではないと思ひますので、よろしくお願ひいたします。そのような希望を述べまして、簡単ながらご挨拶いたします。どうもありがとうございます。

平成二十四年七月七日

前田家第十八代当主 前田 利祐

祝 辞

金沢大学医学部が、創立百五十周年を迎えられましたことを、心からお祝いを申し上げます。

現在の金沢大学医学部は、金沢大学の十六学類の中でも最も歴史が古く、一八六二年に加賀藩が開設した種痘所を起源とする全国の医学部でも三番目に古い歴史を有し、幾多の変遷を経て、今日まで我が国でもトップレベルの医学教育・研究の府として発展を続けてこられました。

この長い歴史の中で、県民の健康を守る優れた医師・医学研究者の育成を使命とし、これまでに一万人を超える有為の人材を輩出されました。また、研究面においても数多くの輝かしい業績を残されており、日本海側の基幹大学である金沢大学を語る上では、医学類の存在は欠かすことができないものであります。

そして、医療の原点である「医の心」を持つて、思いやりのある最善の医療を目指して取り組まれ、地域医療の中核拠点として大きな役割を果たしておられます。

こうした、高い水準の教育、研究、診療を実践されるとともに、さらなる新しい発展をめざして、たゆまぬ挑戦と努力を続けておられる中村学長、富田附属病院長、山本医学部長をはじめ、教職員の皆様方に対し、深く敬意を表する次第であります。

さて、県民の命を守ることは、我々行政の最大の責務であります。そして、医療はまさにその根幹を担うものであります。しかし、新しい臨床研修制度の導入により、近年は地方における医師不足が顕在化しております。幸い、本県では、皆様方のご努力により医療人材の総数は確保できているものの、地域や診療科目によっては偏りが見られる状況であります。

こうした中、寄附講座を通じた診療支援や、医療人材育成のためのCPDセンターの整備を進めていただくなど、医療人材確保に向けた県の取り組みに多大なるご協力をいただいているところであり、この場をお借りして厚く御礼を申し上げます。

また、金沢大学附属病院の改築を進められるなど、より一層の医療環境の整備に努めておられますが、今後とも、こうした新しい環境のもと、県民に最先端の医療を提供いただくことを期待しております。

そして平成二十一年には、県と金沢大学との間で、「医療」の分野も含む「包括連携協定」を締結いただいたところであり、今後も連携を深めながら、県民の安全・安心に直結する地域医療の確保にもご協力を賜りますよう、お願い申し上げます。

最後に、金沢大学医学部の今後益々のご発展と、ご列席の皆様のご健勝を祈念いたしまして、お祝いの言葉とさせていただきます。

平成二十四年七月七日

石川県知事 谷本 正憲

祝 辞

金沢大学医学部の創立百五十周年、誠にめでとうございます。
貴学部は加賀藩が彦三に開設した種痘所を源流として、金沢における医学の基礎を築きました。

時代とともに「第四高等学校医学部」、「金沢大学医学部」とその名は移り変わりましたが、百五十年の長きに渡って、ここ金沢地域の医療の要としてその最先端に立ち、その研究と発展に寄与されるとともに、高い知識と技術そして豊かな人間性を備えた医師の育成に努められ、多くの優秀な卒業生の皆様と共に、市民の健康を支えてこられましたことに、深い感謝と心からの敬意を表する次第です。

近年では、先進医療のさらなる発展を追求するにとどまらず、医学という分野の垣根を越えた、工学、産業、地域などとの連携にも力を注がれ、本市におきましても、健康教育の推進や、介護予防・健康維持に関する普及啓発活動などに取り組んでいただいているほか、地域が抱える様々な課題の解決に向けて、その専門的見地から、数々のご助言、ご指導をいただいているところであります。これも中村学長様、山本医学部長様をはじめ、関係の皆様方のご尽力によるものと、重ねて感謝申し上げます。ここ金沢の地は、明治期以降、貴学をはじめ数多くの高等教育機関を擁する学術文化都市として発展してきました。金沢のまちで学ぶ多くの学生たちは、まちなかに集い、地域の住民たちとの交流を通じて、自らの人間性を磨き、広く社会に貢献する人材へと成長していかれました。

今も貴学の医学生の中に、医師としての技術と知識を学ぶ傍ら、多様な社会貢献活動を行っている方々が多数おられます。

皆様方には、引き続き、こうした学生たちの活動への後押しをお願いいたしますとともに、本市といたしまして、若者が常にチャレンジできるまち、若者にとってチャンスにあふれるまちを目指し、学生のまち金沢にふさわしい環境の整備に努めて参ります。最後に、本式典の開催にご尽力された皆様に改めて敬意を表しますとともに、貴学部の益々のご発展と皆様のさらなるご活躍を心から祈念申し上げ、お祝いの言葉いたします。

平成二十四年七月七日

金沢市長 山野 之義

祝 電 披 露

北陸銀行頭取 高木繁雄
株式会社北國銀行頭取 安宅建樹

創立百五十周年記念式典に到る経過

医薬保健研究域長

（前医学部創立百五十周年記念事業推進準備委員会委員長）

井関 尚一

平成二十二年四月に医学部創立百五十周年記念事業推進準備委員会（以下、委員会）の長を拝命したとき、率直なところ、学類長としての任務の中でこれを最も負担に感じました。前任の金子委員長時代の平成二十年度から記念事業のために教員の給与天引きが行なわれ、また平成二十一年秋には本格的な募金事業が開始されて、記念事業の概要を含む趣意書が医学類HPに掲載されました。このうち創立百五十周年記念誌の編纂事業は山本博教授を中心とするWGによりすでに開始されていましたが、それ以外の事業の詳細は決まっておらず、全学の創基百五十周年記念事業との関係における位置付けも未定でした。

私は全学の記念事業準備にも委員として参加するうちに、十全同窓会の伝統を考慮すればぜひとも医学部創立百五十周年記念式典を全学の式典とは別に行なうべきだと思い、就任後まもない五月の委員会からその方向を打ち出しました。私は十全医学会の理事会メンバーでもあり、また五月の委員会では、式典までに完成させる事業として記念モノメントの作製が承認されました。この計画は山本博

教授の強力なイニシアチブのもと、同窓会、中村学長、古川理事ともご相談したうえで進められ、同年九月の委員会において、明治の金沢医学館第一期生九名のブロンズ像の制作を金沢美術工芸大学の石田陽介教授に依頼する案が承認され、同教授により式典まで一年半の期間をもってモノメント制作が開始されました。また九月の委員会では、この年の春に修復が完成して帰学したキンストレーキについて記録DVDを作製して平成二十四年に記念誌とともに頒布すること、また同窓会の赤祖父理事により特定された彦三の種痘所跡地に全学が建立を予定している石碑とは別に、同窓会の寺畑理事の提案になる金沢医学館跡地の石碑を建立することなどを決定しました。

平成二十三年三月の委員会において、記念式典等の日程を平成二十四年七月七日とし、十全同窓会と十全医学会の総会に引き続き午前中に記念式典と記念講演会、昼からモノメントの除幕式を行い、その後記念祝賀会を行なうという基本案が承認されました。さらに六月の委員会においては、モノメントの設置場所について、各方面からのご意見に基づいて医学類玄関前の高安像の近くとすること、金沢医学館跡地の石碑の設置場所について、金沢市医師会のご協力に基づ

いて同医師会館敷地内とすることが承認されました。また十全医学会との共催による記念講演会の講演者として、京大教授で免疫学者の本庶佑氏と、東大名誉教授で建築家の安藤忠雄氏を選定しました。記念祝賀会の場所としては、医学類中庭を中心とすることが承認されました。これは大正十二年の旧制金沢医科大学開学の祝賀会が、宝町キャンパスの敷地内にテントを張って行なわれたという事例を踏襲したものです。教職員や学生の参加を得やすいこと、モニメント除幕式からただちに移動できること、歴史的な建物である中庭の旧書庫に面することなどが利点と思われました。

これらの決定事項は七月に開かれた委員会と十全同窓会との合同会議において承認を受けました。なお、この合同会議では、記念式典終了後に手をつける記念事業として、従来から標榜されていた十全講堂前のプロムナード整備計画のうち、特にプロムナード入口の位置に医学類正門を移設し、周辺を緑化整備することを優先する案が合意されました。従ってモニメントの設置位置は、将来の正門から入ってすぐの右手ということになります。金沢医学館跡地の石碑は、中村学長による碑銘の揮毫を得て医師会館敷地に建立し、十一月二日の彦三種痘所跡地石碑の除幕式に引き続いて金沢市医師会創立記念日の十一月六日に除幕式を行いました。十二月に開かれた委員会では、記念誌の頒布方法や記念式典の内容についてさらに詳細な検討を行いました。記念式典に合わせ、医学類教育棟二階プロムナードに医学部百五十年の歴史を示すパネルを常設で展示することが

決まりました。パネルの半数ほどは本学資料館特別展「金大始」で使用されたものの流用ですが、残りのパネルは百五十年記念誌編集WGが制作しました。

平成二十四年三月の委員会において、記念式典・講演会の内容をさらに詰めました。記念講演会を共催する十全医学会には、ポスターを始め、高安右人博士の十全医学誌掲載論文を含むパンフなどの作成をお願いしました。また講演会開催のために各企業から十全医学会に寄せられた寄付金を利用していただきました。年度末をもって委員長を新医学類長の山本健教授に引き継ぎました。新委員長のもとで四月に開かれた委員会においては、懸案となっていた記念モニメントの名称を、加藤同窓会理事長の発案になる「医の源流、未来への継承」とすること、プレートの題字の揮毫を記念誌と同じく前田利祐氏にお願いすることが決定しました。山本健委員長は私のときより遙かに迅速に決断行動され、七月七日の記念式典や祝賀会の詳細を、宝町総務課の方々といっしょに業者と相談して進めていただきました。また、祝賀会のみやげをキンストレーキ型のUSBメモリとしたのは、本学の宝物であるキンストレーキの意匠をぜひ使いたいという、医学総務課職員方からのすばらしいご提案があったからです。

記念式典等は無事に終わりました。式典に参加して、連綿と続く本学の歴史のなかの百五十年という節目を現職の教授として経験したことに、あらためて感慨と感謝の念を覚えました。本年十月に予定される医学部創立百五十年記念誌（キンストレーキDVD付き）の刊行を

もって本事業は一段落し、今後は医学類正門付近のキャンパス整備を進めることになります。本学出身でない私が前委員長として何とか重責を果たせたのは、ひとえに委員会メンバーを始め十全同窓会、十全医学会の各位、宝町事務の方々のご協力のおかげです。率直なところ、私の役目は皆様が率先して進められる計画を単にオーソライズしただけだったという気もいたします。本稿では寄付金事

編集委員会より 金沢大学医学部 創立百五十年記念式典

して、九名の日本学士院賞受賞、一名の文化功労者顕彰が紹介された。そして、現在の本学の研究推進の取り組み、後進によるさらなる研究の展開と発展の希望が述べられた。

平成二十四年七月七日（土）午前十時より、十全講堂にて金沢大学医学部創立百五十年記念式典が挙行された。式典当日はやや風が強く、小雨の降る梅雨空であったが、開始三〇分前頃より続々と参加者が集まり、開式時には十全講堂がほぼ満席となった。十全講堂に入りきれなかった参加者は急遽、第一講義室のモニタースクリーンで式典を視聴することとなった。参加者六百名を越える盛会であった。

記念式典では、最初に山本健医学部創立百五十年記念事業実行委員会委員長（昭和四十八年卒業）が式辞を述べた。式辞では、文久二年三月に開設された金澤藩の彦三種痘所を起源とする金沢大学医学部の歴史が紹介された。また、百五十年の間の本学関係者による業績と

業の詳細には触れませんでした。十全同窓会の各位を始めとする多数の方々のご芳志により寄付金は順調に集まり、現時点で一億円に達しました。当初予定の二〇一四年度末までには目標の一億二千万円を越え、その半分以上は正門前を始めとするキャンパス整備に用いることができそうです。同窓会の皆様にはどうぞ引き続き、記念事業の遂行にご協力を賜りますようお願い申し上げます。



受付風景

続いて村田善則文部科学省高等教育局医学教育課長の祝辞では、金沢大学医学部は百五十年の間に一人余りの医師を輩出してきたこと、痛覚伝導路の解明、骨髄移植、アイソトープ治療など日本初の業績により医療の発達に貢献してきたこと、今後も人材育成、研究の面で益々



祝辞：
中村信一学長

次に、本学医学部の出身でもある中村信一学長（昭和四十三年卒業）より祝辞があった。中村学長は、十全講堂が創立百周年の記念に建設されたこと、「十全」の語源、医学部創立百周年からの五十年の出来事などに触れられ、医学部の歩んだ歴史は、伝統と創造の二重らせんの形成の歴史であった、と述べられた。さらに、次の百五十年の間にも、これまで以上に新しい発見、発明を生み、一つでも多くの病気の根絶に寄与されることを大いに期待する、との祝辞を頂いた。



式辞：
山本健 実行委員会委員長



来賓の方々

の発展が期待されること、が述べられた。また、前田家第十八代当主前田利祐氏より、彦三種痘所に端を発する本学医学部は何かと大変ななかでも業績を挙げってきた、今後も業績を挙げて優秀な人材を輩出してほしいとの祝辞を頂いた。



祝辞：
前田利祐氏

さらに谷本正憲石川県知事（代読 竹中博康副知事）、山野之義金沢市長（代読 濱田厚史副市長）の祝辞では、日本でも三番目に古い歴史を持つ本学医学部は多くの人材を輩出し、地域医療の中心として石川県民、金沢市民の健康を守ってきたことに対する謝辞が述べられた。また、今後の益々の発展を祈念すると共に、地域医療の人材確保、医療環境の整備、産業との連携などの面で協力していつてほしいとの祝辞を頂いた。最後に祝電が披露されて閉式となり、引き続き記念講演会が行われた。

（太田 哲生・佐々木 素子 記）



壇上の様子



会場の様子



多数の聴衆

記念講演

京都大学大学院医学研究科特任教授
本庶 佑氏「遺伝子が語る生命像」

生命三〇―四〇億年の歴史を知る一番

の手がかりは遺伝子です。遺伝子が全部含まれたものをゲノムと呼びます。ゲノム帝国主義とは、すべての生命はゲノムによって存在が規定されているという考えであり、私たちはこれを受け入れざるを得ないのであります。物理学における観測による存在の証明とは異なり、ゲノムに書いてないものは存在しないと断言できる点で、生物は自然界で特異な存在です。すなわち遺伝子は有限であるのですが、この有限の遺伝子の機能がどのように拡張して高度な生命現象が営まれているのかを知る必要があります。生命にとって重要なイベントは生老病死であります。我々の生き方、死に方を考えるに当たって生命の理解が不可欠であり、現代はそのような科学的考え方に立って人類の未来を考えていく時代、すなわち「生命の思想」を問う時代であると思います。ゲノム帝国主義とは、元からあった物理学帝国主義という言葉へのアンチテーゼであります。かつて物理学者は物理学の法則で万物のしくみが説明されると考えました。一方、生物は非常に複雑であり、一九〇〇年頃までは奇跡と呼ぶべき神秘的な存在でした。ところが一九五〇年代になってDNAが遺伝情報として生命の存在様式を規定することが分かり、生物は分子とその相互作用からなることが認識されました。さらに今日では、生物は高度な情報

の集積体であると考えられています。

生物の情報にはいくつかの種類があります。まず先天的情報としてのゲノムがあり、DNAの塩基配列の解読により生命の歴史が解明されつつあります。しかしゲノム情報は有限であり、蛋白に翻訳されるヒト遺伝子の数は二万一千個ほどしかなく、ウニと大差がありません。すなわち有限のゲノム情報だけでは高度な生命現象は理解できません。これを補うものとして後天的（獲得）情報があります。例としては大脳における記憶、リンパ球による免疫応答があります。病態というのも異常な情報の蓄積という後天的なものと考えられます。これらはエピジェネティクスと呼ばれ、遺伝子そのものではなく遺伝子の発現による表現形の変化としての情報です。

ゲノム帝国主義を支える生物学の基本原理はダーウィンの進化の原理とメンデルの遺伝の法則の二つです。進化においては遺伝子の突然変異がランダムに起こり、環境に適応した変異遺伝子を持つ個体が生きて残ります。例として、鎌状赤血球症は、ヘモグロビン遺伝子の一塩基の変異に基づく赤血球形態異常による貧血症ですが、変異遺伝子をヘテロで持つ個体はマラリア感染に抵抗性があるために生存に有利であることが分かりました。すなわち環境要因により変異遺伝子が保存されたと考えられます。

もうひとつの例として、オプシンの進化の系統樹があります。動物の進化のうえで、オプシンをもつ光受容体のうち最初にできたのは色彩を感じる受容体でした。ずっと後になり、一部の鳥類や哺乳類で、より高感度の明暗を感じる受容体ができます。さらにその後、霊長類の進化の中で、夜行性の種ではカラーの色覚を失ってモノクロ色覚のみになり、昼行性の類人猿になって再びカラー色覚を回復したことが分かりました。このことは、進化の方向には一定の法則性はなく、偶発的なものであることを示しています。すなわちゲノム帝国主義の基本は、すべての生命体は遺伝的に規定されていること、遺伝情報は核酸の塩基配列で規定されること、また遺伝情報が親子間で、また進化のうえで変化しつつ伝えられることであります。

次に、有限のゲノムの壁を越えるために生物が発達させたしくみを紹介します。ひとつは情報発現の階層性、すなわちどんな遺伝情報がどこでどういう順で発現するかにより、有限な遺伝子から最終的な細胞の表現形の多様性が生まれるしくみです。もうひとつは情報伝達の階層性であり、細胞間での情報の伝わり方により生命現象の多様性が生まれるしくみです。これら階層性には逆行があります。例えば受精卵から遺伝子発現を経て細胞が分化することは不可逆の現象と思われていましたが、山中博士の発見により四つの遺伝子の導入により分化細胞が多能性幹細胞に戻ることがわかりました。これは特定の遺伝子の働きにより情報発現の方向が決まっていたことを意味し、階層性の存在の証明とも言えます。

情報発現においては、ゲノムの転写時と転写後における調節のほか、ゲノム自身がダイナミックに変わるという現象も見られます。例として免疫系の記憶があります。感染症に対する免疫を最初に記述したのはギリシャのツキジデスであり、シチリア戦争の間に何度も発生した天然痘に対して、すでに前回天然痘にかかって生き残った兵士からなる軍では罹患する者が少なかったと書いています。これがその後ワクチンにつながったわけですが、ワクチンが効くしくみは最近まで分かりませんでした。現在では抗体をつくる遺伝子が抗原とは無関係に組換えによる再構成を起こして多数の抗体のレパートリーを形成するしくみと、抗原侵入後に細胞突然変異とクラススイッチ組換えを起こして抗原の記憶を形成するしくみが明らかになりました。後者では当教室で二〇〇〇年に発見された酵素、AIDが中心的役割を果たしています。これは遺伝子そのものの変化による多様性の獲得であります。

生老病死を考えると、遺伝子と環境の狭間にあるのが病であると認識する必要があります。病気の種類により、遺伝的要因と環境的要因とがさまざまな割合で関与して発症します。近年の国民医療費や老人介護費は増える一方であり、遠からず、国が医療費等により破産するところが危惧されます。病に至る段階のどこかで予防的介入をし、国民が病を経ずに寿命を全うできるようにして、医療費を削減することが必要です。これを可能にするためには、ヒトの生命情報すなわち遺伝的要因と環境的要因の情報を統合する必要があります。ゲノムコホート研究

というのは、健康人の遺伝情報を予め調べておく、その後の人生で環境との兼ね合いによりどんな病気を発症するかを前向きコホートにより解析することであり、私が内閣府にいるときに国家プロジェクトとして提案しました。これには個人の全ゲノム塩基配列を含む情報を集める必要があり、住民の包括的同意が必要で、現在すでに行っているものとして、滋賀県長浜市と京都大学の協定による、十二万人の住民のうち一人を対象としたコホート研究があります。このような研究を全国に拡大し、長期にわたって継続すれば、将来的には個人のゲノム、環境、生活習慣などの情報に基づいて個人のライフステージごとに疾病を予防したり、最適な治療を行うことが可能となります。

これまでの医学研究は動物実験や試験管内の解析に頼りすぎました。今後はヒトそのものを直接解析して疾患に迫る時代になります。現在ではわずか一千ドルで個人の全DNA塩基配列を決めることができます。疾病予防により膨大な医療費を毎年減らせることを考えれば安いものです。今後の国家戦略としてはヒト生命情報の統合研究に基づく予防医学に力を入れるべきであると思います。また一般の人の死生観という点においては、一分一秒長く生きることではなく、家族と語りつついかに安らかな死を迎えるかを考えた方がよいと思います。

最後に、がんの話になりますが、がんは遺伝子病であります。環境にある種々の変異原がDNAに傷をつけますが、この傷の大部分は修復されます。修復されずにDNA変異をおこした細胞の大部分

は死に、一部の細胞のみが変異の蓄積によりがん化しますが、がん細胞も多くは免疫反応により排除され、一部のがん細胞のみが増殖してがんになります。放射線による発がんには閾値というものがあり、一定量以下の放射線では有意な影響がありませんので、低レベルの放射能に対する過度の除染は経費の無駄だと思います。がんの薬物療法の可能性として、最近特定のがんの原因遺伝子が判明し、その産物に特異的に働く有効な制がん剤が開発されています。また我々の研究で、がん細胞の多くがキラーTリンパ球の表面にある受容体PD-1を介して免疫応答を抑制することにより攻撃を免れていることが分かりましたので、抗PD-1抗体等によりPD-1を抑制することが広い範囲のがん治療に役立つことが期待されています。

まとめとしまして、現代は生命の思想を問う時代と言えます。生命の偶然性、多様性、ゲノムの有限性の壁を乗り越えるしくみ、遺伝子の変異により未来に備えるしくみについてお話ししました。多数の人間のうち、ひとりとして同一のゲノムを持つてはいません。個人がそれぞれ違う生命の情報をもつことに個の価値や尊厳があります。「生」を知ることは社会に多大な影響を与えます。生命のしくみを理解することがエネルギー、食糧、環境等、地球規模の問題の解決につながります。生物である人間の宿命として、個のレベルでも種のレベルでも、永遠に生きられませんが、我々は常に個の死と種の死を意識して未来のことを考えながら生きていく必要があると思います。

（井関 尚一 記）

東京大学名誉教授 建築家 安藤 忠雄氏 「これからの日本のあり方について」

百五十周年記念講演当日、配布された抄録集より

年々上がり続ける気温、止まらぬ砂漠の拡大、多発するハリケーンや台風などの大災害、人口増加と比例して深刻化する世界的な食糧・水不足、環境の激変で絶滅の危機に瀕する動植物――一九七二年、ローマクラブが発表した「成長の限界」がより間近に、リアルに感じられる。

そもそも地球という資源は、無限のものではない。循環的なプロセスを持たずに激しい資源消費を続けられれば、いつか底をつくのは自然の理だ。一方で、科学文明の発達によって、そこに住む人間の数は十倍単位で増えてきている。無秩序な成長を続けられれば、破綻をきたすのは分りきっていたことだった。私達は、その事実、長いこと目をつむつてきた。

もはや、自然の保護を、自然に頼る時代ではない。人間自身の手で、永続的に両立しうる人間社会と自然環境の関係を構築する努力を始めるべきだ。

とりわけ、私達建築に関するものの責任は大きいと思っている。そもそも自然の中に人工の環境を作り上げていく手段の体系である建築は、本質的に環境破壊を伴わざるを得ない。木材の伐採や石油の採掘などによる自然破壊、そして材料の加工過程、設備の重装備によるエネルギー消費、さらには建築廃材の問題。そ

の存在自体が環境に負荷をかけてしまう、建築こそが環境問題の元凶といつても過言ではない。

ゆえに、問われているのは建築が環境に負担をかけることなく、存在し続ける可能性（サステナビリティ）である。

具体的に言えば、日常的には化石燃料を濫用しないような環境制御のシステム開発、長期スパンで言えば、建物の長寿命化ということになるだろう。

建築界では、とりわけ前者について、オフィスビルのバッファ機能にすぐれたファサードシステムの開発など、興味深い技術提案が数多く見受けられるようになってきているが、より本質的なのは後者の「いかに建物が高く使われるように出来るか」という課題である。

大量のエネルギー消費と大量の廃棄物を後に残す、スクラップアンドビルドを改め、建物を長生きさせていくことが、建築に関わる二酸化炭素排出量の低減と言わずとも、環境配慮として最も有効な手立てであることは、誰の目にも明らかだ。

それは、これから新しくつくる建物のための技術開発の課題というわけではない。むしろ、そうして絶えずより新しい「商品」に更新することが発展と思う風潮、何よりも「建物も消耗品である」という人々の二十世紀的価値観が、これまでの破壊と建設の悪循環の根幹にある。

環境問題が難しいのは、常にそれがこうした人々の生活価値観に関わる問題をはらんでいるからである。

重要なのは、これからいかにするかではなく、今既にある建物をいかにして長く使っていくかということ―社会全体でそうした意識を共有できれば、環境問題への応答と同時に、日本の住環境のレベルも上がるだろうし、さらにその先にある、建物の再生、再利用といった未来へ向かうテーマも見えてくるだろう。

日本の、世界の、地球の未来のために、二十世紀的価値観を超えて新しい時代を切り拓ける人間を創っていくかねばならない。

かつて日本は、悲惨な大戦から奇跡的な復興、経済成長を成し遂げた。「アジアのけん引役」と期待された、その時代をつくったのは、ひたむきで真摯な人生観、人を思いやる協調心といった日本民族の民度の高さと、何よりも、全てを失ってなお、あきらめずに立ち上った人々の死に物狂いの頑張りであった。

だが、取り戻した平和と、勝ち得た経済の豊かさの中で、日本人の心は鈍化した。現状に満足する余り、生きるために考えることをやめた。その象徴が「大学が人生のゴール」といわんばかりの過剰なまでの学歴信仰主義、偏差値重視の画一的な教育制度だろう。そうして弱体化した日本人が、現在のグローバル化した激しい競争社会を前に立ちすくむのも当然だ。今、世界はとてつもないスピードで動いている。その渦の中心がアジアにあるのに、そこに日本はない。

生まれた国も言葉も違う人々と渡り合っていくかねばならない国際社会。その

中で、地球そのものの問題も解決していかなければならない。今までにない、厳しくも難しい時代が始まっている。

そこで、最後に頼れるのは身体から発する人間のエネルギー、生きることに対するどんな欲さだろう。〈ゆとり〉で〈個性〉を育もうという教育改革があったが、大きな勘違いだった。取り戻すべきは日本人の〈野生〉である。必要なのは、厳しさを伴った自由な教育である。

編集委員会より 記念講演会の模様

百五十周年記念式典に引き続き、午前十時から記念講演会が催され、お二人の世界的にご高名な講師によるご講演が行われました。十全講堂は雨にもかかわらず、関係者や教職員、学生で満員の様子でした。

初めに井関尚一医薬保健研究域・学域長の座長のもと、京都大学特任教授・静岡県公立大学法人理事長の本庶佑先生による「遺伝子が語る生命像」の講演が行われました。本庶先生は生命科学の分野において大変ご高名な先生ですが、ご令



本庶 佑氏



安藤忠雄氏

息が本学卒業生であること、ご尊父の出身が富山県であることなど、この北陸の地との縁を語り、我々にとって身近な存在に感じられました。ご講演は物理帝国主義に対するゲノム研究の幕開けから予防医学のあり方、達観された死生観まで多岐にわたり、先生の長年のご経験に基づいた話を温和な語り口で講演され、医学に携わる研究者だけでなく、臨床家や学生にとっても大変、有意義なご講演でした。

次に井上正樹十全医学会会長の座長のもと、東京大学名誉教授で建築家の安藤忠雄先生による「これからの日本のあり方について」の講演が行われました。安藤先生は世界的な建築家であり、石川県内でも西田幾多郎記念哲学館をはじめとした公共建築を手掛けておられます。現在の日本における震災や様々な事件



会場の様子



講演者のお二人

ご自身の過去および現在進行形のプロジェクトの美しい写真とともに熱く講演されました。

お二人の金沢大学医学部および金沢に対する熱い語らいと思いは、百五十周年記念として多くの関係者の記憶に残るものとなりました。

（中村 裕之・中西 清香 記）



講演風景

モニュメント除幕式

金沢医学館第一期生群像建立の経緯

金沢大学医学部創立百五十周年記念事業実行委員会委員 山本 博

除幕式へのご参加有難うございます。
これから披露を行いますのは、本学医学部の前身校に最初に入学した学生たちの像であります。

明治三年、金沢医学館が金沢藩によって創設され、オランダ教師スロイスが藩費をもつて招聘されました。「学生たち」と申しますのは、スロイスから直に西洋医学を学ぶ志と覚悟をもつて入学してきた金沢医学館第一期生九名を指します。

この群像建立の理念は、本学草創期の息吹を後世に、とくに、現在から将来に亘りこのキャンパスで学ぶ若い学生たちに伝えることであります。このモニュメント建立の計画は、平成二十二年五月開催の記念事業実行委員会決定されました。

モニュメントの制作は、キャンパスが隣り合い、金沢大学との間で包括協定も取り交わしていただいています金沢美術工芸大学の石田陽介教授にお願いしました。金沢医学館跡地に立つ金沢市医師会館に残された一枚の写真を基に、石田先生は、第一期生九名が遍く四方を望む立体的な群像を構想され、二



経緯説明：山本博医学系長

年に満たない短期間のうちに、ミニチュア塑像、等身大塑像、石膏像の各段階を経、すばらしい銅像に仕上げられました。写真のとおり、九名全員が帯刀しています。基となりました写真は、断髪令が布告された明治四年と廃刀令が布告された明治九年の間に撮影されたと推定されています。

碑文のタイトル「医の源流 未来への継承」は医学館のみならず彦三種痘所、第四高等中学校など本学にゆかりの深い前田家の当代当主前田利祐様にご揮毫いただきました。碑文は、外国からの留学生や訪問客にも理解いただけるよう、ハーバード大学医学部教授で本学同窓会ボストン支部長の広瀬竜夫先生に英訳いただきました。また、同窓の白井澄先生のご篤志により、モニュメント周辺の環境整備がなされました。近い将来には、学校側の正門が十全講堂の真正面に設けられ、広い真つ直ぐなメインプロムナードが講堂と正門をつなぐことになりました。すると、このモニュメントは、正門を入ってすぐ右手に現れ、市民を含む、さらに多くの方々の目に留まるようになるであります。

最後に、金沢大学医学部創立百五十周年記念事業にご篤志をお寄せいただきました、すべての皆様に重ねて感謝申し上げます。簡単ですが、経緯説明とさせていただきます。



除幕式記念撮影

金沢大学医学部創立百五十周年記念 モニュメントを制作して～一枚の写真から～

金沢美術工芸大学教授・日展会員 石田 陽介

平成二十二年に結ばれた金沢大学と金沢美術工芸大学の大学間交流包括協定のご縁で、この度宝町キャンパス（医学部ならびに附属病院）の記念モニュメントを制作させて頂いた。金沢医学館（金沢大学医学部の前身）の第一期生九名の群像である。普段は自由な表現行為として行っている彫刻制作ではあるが、当然のことながら具体的事象を記念するモニュメントの制作には様々な制約が生じる。今回の依頼は現在金沢市医師会に保存されている明治六年（一八七三）頃撮影（撮影時期は赤祖父一知北陸医史学会長の推定による）の一枚の写真をもとに、医学部草創期の若きエネルギーを今に甦らせるというものである。

さて、この一枚の写真であるが、拝見したところ厳密な意味でのオリジナルではないと思われた。何度か複写を経て現在に至っているようである。写真はまだまだ珍しく貴重な時代、九人の若者たちが写真館でポーズをとり、露光するまでのしばし、息を凝らしているであろう様子は想像に難くない。後列右端の青年は残念なことに身体が動いたようで、全身がぼやけて写っている。全体に粒子は粗く、細部はほとんど判別不能である。さらによく見ると何とも不自然な陰影がある。目元などもどう見ても自然ではない。これは昔の写真によくある修正の跡と思

われる。

時代は明治初頭で和洋の文化が渾然となっている頃で、これも判別はしにくい。髪を結っているのではないかと思われる髪型が見受けられる。また、着物の下には洋物のシャツを着ている人物も何人かいるようにも見える。髪型については断髪令が明治四年に発せられていることから、記念事業実行委員会の方々とも相談の上、全員断髪で制作することになった。洋シャツについても統一感を考慮し和装に揃えることとした。

彫刻というのは元来あまり細部にこだわるよりも、細部を捨て、全体感を出したほうが作品として良いものになるものだ。この写りの悪さはむしろプラスに考へることとした。不思議なもので目を凝らしてみても、手元から写真を離し、ぼんやりと見ているほうが立体的に見える。それぞれ存在感や個性等も感じとれるようになるものである。

余談ではあるが、彫刻家は必ずしも視力がよいとは限らない。かのオーギュスト・ロダンは近視であったというの有名な話である。美大での指導においてもデッサンや塑造の制作時に学生たちによく言うことは「離れて見なさい」ということで、この写真を見て改めてその大切さを思い知らされた。

さて、医学館一期生は既に歴史の一

ページとなっており、そのことをモニュメントとして顕彰することも然り乍ら、モニュメント自体も「彫刻」として歴史に残るわけであるから、単なる写真の立体化ということではなく、それ自体が彫刻として自立した魅力を備えなければならぬ。実在した人々を現すという制約のもと、彫刻作品としていかに魅力のあるものとするかが我々の腕の見せ所といえよう。それには作品全体の構成が重要となる。そして野外に設置される場合は周囲の空間や環境との関係も考慮しなければならぬ。そこで全体の構成は横二列に写っている青年たちを放射状に配置することとした。外国人教師から西洋医学を直に学ぶことを志した九人の若き医学生たちのエネルギーが一つになり、そして一つになったエネルギーが増幅され四方八方に放たれる。そのようなイメージが表現できるよう腐心した。

マスタープランができあがれば、後は時間との闘いである。記念式典に間に合わせるべく、精一杯の仕事が続く。多くの方々の協力を得て晴れの日を無事に迎えることが出来た。

平成二十年、昭和三十三年卒クラス会の企画で医学部を懐古見学することとなり解剖標本庫、記念館資料室などをみた。資料室の棚の奥に古い写真が一つ、額は

金沢大学医学部創立百五十周年記念モニュメント除幕式 その一人藤本純吉（一八五〇～一九三八）

竹内 桂一（昭和三十三年卒業）

今後、宝町キャンパスは構内の整備が順次行われ、このモニュメントは新しくできる正門から入ったプロムナードのすぐ右脇に位置することになるとうかがっている。記念事業実行委員会の山本博医学類教授の言葉をお借りすれば「学生たちのために、ときにその周囲で憩えるような、本校ならではの造形をキャンパスに設け、これにより、在校時にあつては金沢大学医学類・医学部医学科の学生としてのアイデンティティー形成に与り、巣立つた後にも、本学で学んだ思い出を甦らせ、誇りを維持することに貢献する」（医学類医王保護者の会だよりNo.二十三）とのことである。ある意味で医学部の精神の核となることを期待されているわけで、その責は重いものがある。しかし作家に出来るのは誠心誠意作品を仕上げることにしかない。この後、私に出来ることがあるとすれば、私の手を離れたこの若者たちが、多くの人々に愛され、新たな命が吹き込まれることを祈ることしかない。一枚の写真と向き合ったあの日々を思いながら。

なく無造作に立てかけてあった。それは金沢医学館第一期生九名の写真で、藤本純吉が後列右端にいた。全員帯刀し髷を結っている。藤本純吉は母の母方の祖父

で、私には曾祖父になる。純吉が開業していた頃、母は遊びに行つて可愛がられていたらしくよく話題にしていた。白髪

の怖いお婆さんみたいなので晩年の頃か。昔の開業医の家を想像し可愛い孫とお爺さんの風景を思い浮かべた。片や、母の父方の祖父前田式部（規遵）は明治十年三月西南戦争に従軍、肥後国宮ヶ原にて二十五歳で戦死、頭髮のみが金沢市野田山墓地に入っている。ノブレス・オブリージュだったのか。母にとつてお爺さんは純吉であつた。

藤本純吉は太鼓の達人で、ある財閥の正月恒例の行事で宮中に参賀、能を奉納する一員に加わっていた。母が語るとき誇らしげであつた。

純吉は、嘉永三年四月十三日（一八五〇）金沢・三社根垣町二十四、加賀藩士小泉彌太郎の次男として生まれ、十四歳のとき加賀藩御手役者（能楽観世流太郎）藤本長右衛門の養子となつた。太鼓は義父に伴い江戸にて修行している。

慶応二年（一八六六）前田慶寧が第十四代藩主となり、卯辰山に養生所をつくつた。黒川良安、津田淳三、田中信吾、大田美農里を棟取に任命する。黒川良安は越中の医師玄龍の子で、十二歳の時父に従い長崎で蘭語を学びジールボルトからも蘭学を修めている。江戸に上つて坪井信道門下にて坪井塾塾頭を五年間務め、緒方洪庵とも親交があつた。又、信州、佐久間象山宅にて象山に蘭学を教え、象山から漢学を学び肝胆相照らす仲であつた。天保十一年（一八四〇）請われて加賀藩に仕え侍医、更に翻訳方を兼務した。彦三種痘所を含め蘭学発展に寄与するな

ど大きな貢献をしている。津田淳三、田中信吾、大田美農里の三人は適塾出身と錚々たる陣営であつた。

明治二年（一八六九）は廃藩置県、版籍奉還、士族の廃止、文明開化の時代であつた。しかし士族にとつて藩からの縁がなくなり生活の場を求めなくてはならなくなる。過渡期的に士族は長男が継ぎ、次男は平民にされた。次男純吉は藤本家の養子として立派に能楽観世流の太鼓として藩に仕えていたが、明治二年十九歳、黒川良安について三年間医学を習い、明治四年に金沢医学館に入学し一期生となつた。この年前田慶寧は藩知事を罷免される。

オランダ人教師・スロイスは明治四年から四年間、後任のホルトマンは明治八年から五年間、教鞭をとつた。スロイスの授業は厳しく講義に遅刻すれば欠席とし、試験に無届欠席は破門にされた。

明治五年、政府の学制改革により藩以来の公立学校は廃止されて金沢医学館の存続の危機になる。因みに本科一年生の授業料二十銭、五年生四十銭である。

スロイスの年俸七千二百円は年間経費のほぼ五〇%を占めていた。明治六年、県から毎月三百円、金沢町から二百円支給されることになり病院は半官半民となる。同年八月文部省の命により医学館を金沢病院と命名するよう通達をうける。明治八年六月医学館は県に移管され、従来の医学館は石川県（金沢）病院となる。

学生も医学修業には容易ならぬ努力と費用がかかり医学館創立以来の入学者数は三百十九名に達したが、中途退学するものが多く、卒業できたものは僅か八十

名に過ぎなかったといわれている。（金沢大学五十年通史編）

藤本純吉の履歴書から

明治八年七月十二日石川県金沢病院副直医

（明治八年二月医術開業試験・東京・京都・大阪に通達。）

（明治九年同じく各県に通達する。）

明治十一年二月五日内務卿より藤本純吉・内外科医術開業免状第五九二号受。

明治十一年九月廿日石川県金沢医学所助教諭兼務

明治十二年十一月十三日石川県金沢医学所教諭

（田中信吾校長の依頼でオーストリ人教師・ローレッツが産科学、衛生学を講義、明治十三年五月〜八月）

明治十四年四月十五日金沢病院当直医

明治十六年十二月廿二日金沢医学学校御用掛

明治十七年一月月俸四十五円に増給

明治十七年十二月廿五日依願職務差免

以上、明治十八年一月に書いた履歴書から勤務状態を抜粋。

明治十八年 田中信吾は藤本純吉他、多数を引きつれ金沢市博労町に尾山病院を開業し盛況を極め、殿町の金沢病院は大きな打撃を受け一時寂れた。オランダ医学とドイツ医学、甲種医学と乙種医学学校の制度の変革期の問題も関係があつたのかもしれない。

明治二十年、類焼に遭い尾山病院は西町三番町に移転し、明治三十四年



モニュメント：金沢医学館第一期生九名の像



金沢医学館第一期生
前列向かって左より 藤井貞為、上杉寛二、稲坂謙吉、不破鎖吉
後列向かって左より 三沢敬吉、須賀忠愛、宮北徳、上出達三、藤本純吉
(金沢市医師会蔵)

（一九〇一）から純吉が院長職を務める。
大正元年（一九一二）閉院。

同年自宅で開業。味噌蔵町下中町八・
一、（現、大手町九・二・二三）

純吉と貞の間に一男三女が恵まれた。
長女操が前田式部（栄次郎）に嫁ぎ、孫・
三男四女が生まれる。開業後も医会活動
に尽力し、大日本歌道奨励会石川支部幹
事、観世流北国筋流義芸道取締など務め
ている。昭和十三年一月二十六日病没。
享年八十八歳。菩提寺は浄土宗如来寺、
金澤市小立野にある。

この間の講義録・蔵書並びに資料を昭
和八年に寄贈、純吉の孫・茂男が昭和
十三年追加寄贈、金沢市立図書館近世史
料館に藤本文庫として保存されている。

藤本文庫目録の蔵書の範囲は非常に多
岐にわたり、郷土史、宗教、哲学、教育、
法律、政治、経済、社会、産業、交通、
通信、理学、医学、衛生、工学、兵事、
芸術、所技、運動、文学、語学、歴史、
地誌など二千四十七点にのぼる。

理学、医学、衛生関係は二百十七点あ
り、その内、純吉・編著四、写五十一。

藤本文庫は医学教育史のみならず、医
学史の貴重な文庫として利用されてい
る。

金沢医学館で明治十年ホルトマンの講
義をうけ、二年後東京にて学んだ田中義
雄は『その教科書の簡略なるに一驚を喫
したり』と、更に『母校（金沢医学館）
を遥拝して恩師の高恩を肝銘拝謝せり。』
といった。そのように当時金沢医学館の
教育は最高水準を誇っていた。その医学
講座を克明に記録した純吉の筆写及び蔵
書は現代に至ってもなお研究尽くせない
ものがあるようだ。

真摯な生涯を送った藤本純吉及び金沢
医学館一期生方々の銅像除幕式に参加の
光栄をいただき創立百五十年記念関係の
方々に深く感謝申し上げます。

文 献

藤本文庫目録…金沢市立図書館・昭和
十七年九月十日

金沢大学五十年史通史編・金沢医科大学・
前身各校・一九九六

寺畑喜朔…金沢の医学百年、昭和五十
一年五月一日

寺畑喜朔…「医学部百五十年史のため
の覚え書（一）」十全同窓会会報、第
百十八号、平成十三年五月三十一日

多留淳文…講義筆記録を残した藤本純
吉、十全同窓会報、第一一八号平成一
三年五月三十一日

赤祖父一知…藤本純吉記「老烈氏方叢」・
『北陸医史』第二十三巻第一号二〇〇二、
平成十四年四月一日

竹内桂一…藤本純吉と加賀前田家・『北
陸医史』第二十三巻第一号二〇〇二、平
成十四年四月一日

板垣英治…石川県甲種医学学校の医学教
育、医学教科書と参考書から医学教育を
みる・日本海域研究、第四十号九十一、
一〇三頁、二〇〇九

赤祖父一知…地方医学に尽くした英才・
黒川良安・北国文華第四十五号、平成
二十二年（二〇一〇）九月一日

編集委員会より モニュメント除幕式

平成二十四年七月七日、小雨の降る中、
金沢大学医学部創立百五十年記念モノ
メント除幕式が挙行された。まず、金沢
大学医薬保健研究域医学系・山本博系長
から、金沢医学館第一期生の現存する写
真をもとにして、金沢美術工芸大学美術
工芸学部美術科・石田陽介教授がモノ
メントを制作した経緯が説明された。次
に、司会者より除幕者が紹介された。除
幕者は紹介順に、金沢大学・中村信一学
長、文部科学省高等教育局医学教育・村
田善則課長、厚生労働省医政局研究開発
振興・佐原康之課長、金沢美術工芸大学
美術工芸学部美術科・石田陽介教授、金
沢医学館第一期生の稲坂謙吉氏のご血胤
の稲坂暢氏、同藤本純吉のご血胤の竹内
桂一氏、金沢医学館職員津田淳三氏の



除幕の様子



除幕式の様子

ご血胤であり、稲坂謙吉氏のご縁者でも
ある津田淳一氏、医療法人社団明徳会静
岡医療科学専門学校理事兼協立十全病院
の臼井溢院長、金沢大学医学部十全同窓
会・佐藤保会長、金沢大学医学部十全同
窓会ボストン支部・広瀬電夫支部長、金
沢大学・古川侃理事（財務・附属病院担
当）、金沢大学附属病院・富田勝郎病院長、
金沢大学十全医学会・井上正樹会長、金
沢大学医学部創立百五十年事業実行委
員長でもある金沢大学医薬保健研究域医
学類・山本健医学類長、金沢大学医薬保
健研究域・井関尚一域長、金沢大学医薬
保健研究域医学系・山本博系長の諸氏で
あった。モノメントを囲む大勢の聴衆
からの盛大な拍手の中、除幕者が綱を引
き、モノメントにかけられた布の下か
ら金沢医学館第一期生九名の像が姿を現
した。除幕の後、モノメントと一緒に
除幕者の記念撮影が行われた。

（山岸 正和・若山 友彦 記）

記念祝賀会

創立百五十周年記念祝賀会に参列して

十全同窓会会長 佐藤 保

すでにご承知のとおり、今年、金沢大学医薬保健学域医学類は、文久二年（一八六二）三月、加賀藩の彦三種痘所開設を濫觴として、創立百五十周年を迎えました。本学は国立大学医学部としては、長崎大学、東京大学につづいて全国第三位の由緒ある伝統を誇り、本年七月七日、六百名の参列者のもとに創立百五十周年記念式典および祝賀会が盛大に開催されました。全国の十全同窓会員と共にこの慶賀を寿ぎ、記念事業達成のために会員諸兄から多大の有形無形のご援助を賜りましたことに深く感謝申し上げます。

さて当日は、午前九時から記念館にて平成二十四年度十全同窓会を開催し、引き続き十時から十全講堂で記念式典、十時四〇分から記念講演が行われました。記念式典では中村信一・金沢大学学長、村田善則・文部科学省高等教育局医学教育課長、前田利祐・前田家第十八代当主、竹中博康・石川県副知事、浜田厚史・金沢市副市長が来賓として祝辞を述べられました。

ついで十全医学会シンポジウムを兼ねた記念講演会が本庶佑・京都大学大学院特任教授ならびに建築家・安藤忠雄東大名誉教授をお招きして開かれました。本庶教授は、「遺伝子が語る生命像」と題し、安藤氏は、「これからの日本のあり方について」と題して、それぞれ独自

に開拓された世界観に基づく講演で、聴衆に深い感銘を与えられました（両講師の講演写真）。

午後一時からは医学部玄関前広場に設置されたモニメントの除幕式が行われました。写真に残された金沢医学館・第一期生九名の肖像（会報第百五十一号一ページに掲載）に基づき、石田陽介・金沢美術工芸大学教授が塑像に制作されたもので、「医の源流、未来への継承」と命名されました。除幕式には第一期生の末裔である稲坂暢、竹内桂一、津田淳一の三氏をはじめ、前田利祐・前田家第十八代当主ら来賓ならびに本学関係者が参列し、前田家の文化を継承する意義深い除幕式となりました。



乾杯の挨拶をする
佐藤保十全同窓会会長

梅雨の季節で生憎の空模様でしたが、テントに覆われた教育棟の中庭とロビーで園遊会形式の祝賀会が開かれました。学生諸君の奏でる演奏や歌を背景に、久方ぶりに会った方々が時の経つのを忘れて、旧懐談に花を咲かせました。中庭には宝町最古の建物となった旧書庫が長い歴史を内に秘めて佇んでおり、百五十周年記念祝賀会にふさわしい雰囲気醸し出していました。

顧みますと、金沢大学医学部は、その開祖とみなされる黒川良安を中心に、地元出身の多くの適塾門下生に支えられ、卯辰山養成所から金沢医学館、石川県甲種医学学校、第四高等学校校医学部、金沢医学専門学校を経て、今日の金沢大学医学部に到る長い道のりを、わが国の命運とともに歩んで参りました。

蘭学事始めの当時から、人の命を思う医のこころは、今日まで連綿と続いて絶えることはありませんでした。しかし医学ほど時の政治体制によって変わる学問もありません。潮のように拡がった蘭学も、明治政府の方針からドイツ医学に取って代わり、全国の大学はドイツ医学一色に変わり、太平洋戦争の終わるまで大学医局制度として続きました。そして終戦によって状況は一変し、今日までアメリカ医学が主流となっております。

その間、医学の発展はまことに目覚ましいものがあり、今日ひとの遺伝子の全てが解明され、遺伝子によって生物の系統樹をたどるまでに知識は拡大しました。またひとの平均寿命も過去の二倍近くに延びております。しかしその反面、がんの征圧や認知症の克服は今日未解決の課題であり、その一方、高齢化による老々



乾杯の様子

介護や孤独死が大きな社会問題となっております。「ひととは死ぬべき存在である」ことは、今も昔も変わっておりません。危険予知学の専門家・畑村洋太郎氏は「人間が開発したある技術分野で、十分な経験を積むには二百年かかる」といわれます。その意味では、西洋医学百五十

年の歴史は長いようですが、思うままに操るにはまだ若い学問といえましょう。「歴史とは、現在と過去との対話である」というE. H. カールの言葉に従えば、百五十周年を迎えたことを契機として、現在山積している医学上の課題を、歴史に照らして再考してみることが、大きな意義のある記念事業かと思われま

す。祝賀会に参列出来たことを慶び、聊か私個人の所感を述べました。

金沢の思い出―昭和四〇年頃

九州大学名誉教授 元金沢大学教授 大村 裕



左 九州大学名誉教授 大村裕先生、右 山本健実行委員長

私がボルチモアのジョンズホプキンス大学生物物理学教室に研究生でいた一九五五年の春、金大医学部生理学教室の私の前任教授である岩間吉也教授が尋ねてこられた。岩間先生はその頃は東北大学医学部加賀市出身の本川弘一教授の生理学教室で視覚の研究をされていた。本川先生は石川県の誇る偉大な生理学者である。本川先生は東京大学医学部物理教室では寸暇も惜しんで研究されるため、尿瓶を机の横に置いておられたそうである。後に東北大学総長として活躍された。岩間先生は本川先生の網膜の色覚生体実験の生体被験者にもなつて教授と

共同研究をされていた。岩間先生はジョンズホプキンス大学医学部生理学教室の有名な同じく網膜の研究者ステイブ・クフラー教授を訪問されたのである。岩間先生が本川先生と色覚の共同研究について話されたところ、クフラー教授は、その実験は、網膜の生理ではなく視覚伝達の経路から視覚中枢に至る研究で網膜の話ではないとさんざんこきおろされたそうである。岩間先生はその悔しさを私に話された。私はそのとき岩間先生を次に述べる話で慰めた。一九五四年の夏三ヵ月間、私は脳波記録器や電気刺激装置を製作しているグラス製作会社の提供しているグラス奨学金を得てウエズホール海浜研究所でイカの単一神経線維の興奮メカニズムを研究することができた。ある日実験の合間に浜辺で東京医科歯科大の萩原生長さんと遊んでいるとき、クフラー先生とドイツから留学していた共同研究者のボルフガング・トラウトワイン博士と出会った。そのときクフラー先生は私に、ラルフ・ゼラルト先生のところで何をしているのかと尋ねられた。私はラットの培養神経細胞が興奮するかどうか実験中だと話した。そのため、二〇μm直径の細胞に一本のガラス微小電極を刺入して、刺激と発生する活動電位を同等に記録するためホーイストンブリッジを応用していると話をした。クフラー先生は、「ホーイストンブリッジとは何か、

ボルフガング君は知っているか」と言われた。トラウトワインさんも「いや知らぬ」と云われた。岩間先生は愉快そうに笑いながら云われた。「生理学の正体みたり枯尾花」。

私が金沢大学に赴任したある晩秋の頃、勝木先生と本川先生が金沢にいられた。勝木先生（東京医科歯科大医学部生理学教授、後に岡崎共同研究機構生理学研究所所長、後に同研究機構長）も小松市出身で石川県が生んだ偉人である。その時の金沢市長は岡良一さんで、勝木・本川先生らと親友である。ある夜明前、岡さんとわれわれ三人は岡さんに従って山頂についた。岡さんを囲んで七輪で火を起し、霞み網に掛かった小鳥で焼き鳥を御馳走になった。たれば土中に埋め新聞紙で蓋をした瓶からすくった。蓋を

編集委員会より

金沢大学医学部創立百五十周年記念式典 記念祝賀会の模様

平成二十四（二〇一二）年七月七日小雨模様なか、午前十時から始まった金沢大学医学部創立百五十周年記念式典は、午前中の記念講演会、十三時から記念モノキュメント除幕式が盛大に行われた。引き続き、十三時三〇分から金沢大学医学部創立百五十周年記念祝賀会が執り行われた。

前夜の激しい雨ほどではないものの、あいにくの雨模様の中、医学類教育棟一階に加えて、テントが張られた中庭

破つて迄入ったへじがあるほど味はよいのだと岡さんは話された。おおらかな街の雰囲気は金沢の特長である。

十一年間金沢大学で過すうち、教室で一緒に研究した助教授の大山浩君は金沢医科大学教授に、助手の小原昭作君は帝京大医学部教授、沢田正史君は島根医大助教授、大学学生の山本鉄郎君、中文彦君、中村勉君及び山田請幸君は臨床に進んだ。同じく大学院生的小林宣泰君は金沢大学医学部教授、小野武年君は富山医科薬科大学教授（後に学長）、竹田公久君は鳥取大学理学部教授、杉森睦之君はニューヨーク大学医学部生理学教授、喜多均君はテネシー大学医学部生理学教授、清水宣明君は金沢大学工学部教授である。谷川孝子君は現在喜多均夫人である。

が会場となった。開式の辞の後、山本健金沢大学医学部創立百五十周年記念事業実行委員会委員長（医薬保健学域医学

類長）が挨拶し、続いて、創立百五十周年を祝した佐藤保十全同窓会会長の乾杯の発声とともに盛大に祝賀会の幕が切つて落とされた。雨の中参集された多数の参加者の笑顔と笑い声が溢れるにぎやかな懇談が始まり、医師国家試験勉強のため活動を休止していた研修医五名の男声グループ「ハモラ内科」の華麗なハーモニー、並びに金沢大学附属病院の教職員有志で結成された「アンサンブル金沢大学病院」の美しい室内管弦楽の音色が花を添えた。



ハモら内科

あいにくの天候であつたにも拘らず、六百名近い方々に参集頂き、歓談は尽きることがなかった。名残を惜しみつつ、富田勝郎金沢大学附属病院長による万歳三唱により、金沢大学医学部創立百五十周年記念式典は成功裏のうちに幕を閉じた。

また、この記念祝賀会と並行して、医学部記念館資料室が開放された。前身校以来代々引き継がれた貴重な資料が展示され、多くの方が見入った。さらに、医学部教育棟1階では、Bulletinから各研究分野の研究内容を示すパネルが展示されており、学生、参加者と教職員が熱心に研究内容などの話を交わしていた。同教育棟二階では、百五十年の医学部の歴史を象徴する業績、偉大な先達の足跡を辿ることの出来る金沢大学医学部関連の五十七枚ものパネルが、所狭しと展示されていた。



キンストレーキをモチーフとした記念品のUSBメモリー



アンサンブル金沢大学病院

た。杉山和久眼科学教授の解説が付記された、高安病の発見となった旧金沢医科大学初代学長 高安右人先生の原著論文、並びにキンストレーキをモチーフとしたUSBメモリーや金大煎餅の入った記念品が参加者に配られた後、次世代への飛躍と記念式典の余韻を胸にして、三々五々解散となった。

（和田 隆志・大島 徹 記）



祝賀会の様子



万歳三唱する富田勝郎附属病院長

前列左より 井関尚一 医薬保健研究域長、山本博医学系長、山本健医学類長、富田勝郎金沢大学附属病院長
後列左より 中尾眞二教授、井上正樹十全医学会長、山岸正和教授



本番直前の記念事業実行委員会（2012.6.26）



加藤聖十全同窓会理事長



大島徹教授



金子周一教授













